空間コンセプトと機能方針

通過する駅前から、日常がつながる駅前へ

4つのWELLを「分棟型複合拠点」と「立体歩行ネットワーク」で具現化する

病院・商業・住宅を単一の複合ビルに閉じ込めるのではなく、安全性と独立性を確保した「分棟配置」を採用。
新駅・ペデストリアンデッキ・多目的広場を介して人の行動が施設をまたぎ、朝から夜、平日から休日、
さらには非常時まで、多世代の日常が自然に重なり合う空間基盤を形成します。





敷地をつなぎ、暮らしを重ね、日常と非常時を支えることで、通過するだけではない、安心とにぎわいが続く駅前をつくる。

計画 Point 1

暮らしをつなぎ、東大阪の新しい都市の形をつくる

にぎわいを施設の大きさではなく、暮らしの積み重なりから育てる



病院・商業・住宅をペデストリアンデッキと緑豊かな広場・オープンスペースで結び、新駅や東大阪市役所、大阪府立中央図書館など周辺の都市機能へつながる**一つの生活圏**を形成します。「住む、働く、学ぶ、通院する、遊ぶ、散歩する」といった日常を街全体でつなぎ、施設の集合ではなく、**暮らしそのものがつながる**、東大阪の新しい都市の形を創出します。

計画 Point 2

東大阪の新しい顔となる、"まちのリビング"を駅前に

朝・昼・夕・夜。異なる人の活動が重なり、駅前の日常が続いていく

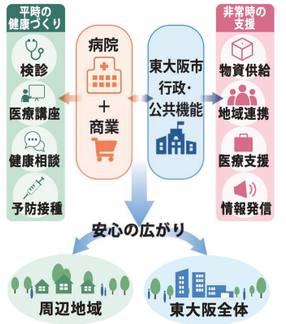


通院する人、買い物をする人、働く人、暮らす人、遊びに来る親子。異なる目的と時間を持つ**人々の日常を重ねる**ことで、朝から夜、平日から休日まで、**人の気配が自然に続く駅前を**つくります。豊かな緑に包まれた広場や、まちのあちこちに生まれる**「立ち止まれる場所」**が人々の時間をやさしく受け止め、誰もが自分らしく過ごせる**「まちのリビング」**を育てます。

計画 Point 3

日常からのつながり、非日常も支え合えるまち

日頃の連携を積み重ねることが、非常時の強さにつながる



安心は、非常時だけにつくるものではありません。病院と東大阪市や市立東大阪医療センターをはじめとする行政・公共機能が**日頃から連携・協力**し、**市民の健康を支える活動**を地域へ広げます。そこで育まれたつながりは、災害や感染症流行時には**周辺地域を支える力**となります。日常の健康づくりから非常時の支援まで、この街区を起点に周辺地域、そして**東大阪へ安心を広げる拠点**を創出します。

※この内容は、事業予定者を選定した現時点のものであり、今後の関係各所との協議により変更となる場合があります。また、事業区域外の提案内容については、直接の評価対象とはしていません。